

◆連載-Vol.21

# 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



## 執筆者プロフィール

**中谷 正人** (なかたに・まさと)  
1948 神奈川県生まれ。1971 年  
千葉大学建築学科卒業、『住宅  
特集』『新建築』編集長を経て  
1994 年からフリー編集者。  
1999 年~2014 年千葉大学客  
員教授。木の建築フォーラム理事、  
日本建築学会建築文化事業委員  
会幹事

## 現代建築の開拓者たちとその軌跡 3

### 坂倉準三 モダニズムと繊細さ

戦後の建築の動向について、まず丹下健三から始めて村野藤吾、吉田五十八へと続けた。これは現代建築の流れを語ろうとすれば当然であったが、その後は年代順としたため、図らずも現代建築から見ればちょっと違った流れとなった。村野も吉田も広い意味での装飾を大切にしていたからだ。しかしこの後、生年順に追っていくと坂倉準三 (0901)、谷口吉郎 (1904)、前川國男、白井晟一 (1905) と続き、さらに吉村順三 (1908)、そして丹下健三 (1913) となる。

こうなると、それぞれ一家を成していた諸先輩に対して、丹下がちゃきちゃきのモダニストとして打って出たのはかなり戦略的だったように見えてくる。そして、それを援護したのが当時の評論家、浅田孝、川添登、濱口隆一などであったことはすでに記した。それが功を奏したのか、あるいは社会自体がそのような方向に進んだのか、様式としてはモダニズムが一世を風靡していることは間違いない。もちろん様式論争、ポストモダニズムなど、多くの揺り返しはあったものの大勢に変化はなく、新しい建築様式の模索は今でも続いている。

話を元に戻そう。戦後のモダニズムの大きな流れの推進役のひとりとして坂倉準三を挙げることに異論はないであろう。1951年に竣工した「神奈川県立近代美術館」は DOCOMOMO JAPAN に選定され、日本におけるモダン・

ムーブメントの建築と位置づけられている。今年の1月31日をもって閉館にしたが、多くの建築家が再訪して偲んでいたのは記憶に新しい。

ル・コルビュジエをさらに繊細にしたといったらコルに怒られるだろうか。ラ・トゥーレットを訪れたとき、方立てなど細身のデザインにもかかわらず、エッジを見ると粗骨材現し仕上げ。こりゃ「打放し」ではなく「やりっ放し」ではないかと思った。ところが国立西洋美術館など、海外建築家の設計を日本で施工すると、きちっと仕上げられる。これをみたコルが、もっとラフでよかったのに、とつぶやいたのは都市伝説か。

そして前川國男、吉村順三とともに六本木の「国際文化会館」(1955)の設計に携わり、最上階にプラネタリウムがあった渋谷の「東急文化会館」(1957 現存せず)、鳥羽市庁舎、横浜の山下公園に面したシルクセンター (ともに1959) などをはじめ庁舎や公共建築の分野でも活躍し、1966年に「新宿駅西口広場」、翌年にこれと連続する「小田急電鉄西口本屋ビル」(現小田急百貨店本店)を完成させた。蛇足ながら、大阪から現場監理で常駐しながら自邸「塔の家」を設計したのが東孝光であったが、東については改めて触れることになるだろう。かつての新宿駅西側は淀橋浄水場で広漠とした場所だった。「淀橋」という言葉はいまでも「ヨドバシカメラ」の名称に名残を留めている。副都心として超高層ビルが林立し始める前のことであった。

私の学生時代、「霞が関ビル」はまだ工事中だった。新宿の西口広場は完成していたが、中央公園などまだ雑草が生い

茂る空き地状態。そんな環境の中で人々が集う場として計画された「広場」であったはずが、70年安保を控えて反戦集会の場となり、フォーク集会が始まったりしたため、当局は「広場」ではなく「通路」だとして道路交通法を適用して集会を規制するようになった。そのプロセスを私の同世代は経験しているはずだ。磯崎の世代が焼け跡派で、それに続く伊東豊雄や安藤忠雄たちの世代が平和な時代の野武士だと横文彦が表現したが、団塊の世代は…やはり団塊の世代でしかないのか。まあ、新宿はゴールデン街などとともほろ苦い思い出が詰まった場所でもあるのだが、西口広場が坂倉準三の設計であったことは後になって知ったことだ。

ついでながら大手町にあった「富士銀行本店」(現大手町タワー)の足元回りに計画された、マンハッタンにあるポケットパークのような広場も同様に立ち入り禁止となった。日本にも「都市」という概念が広まるにつれて、高密な都心部にも広場が設けられるようになったのだが、どうやら時期が悪かったようだ。都市における広場のあり方が問われる前にこのような事態が発生したことが原因で、今でも広場という言葉が曖昧なままに使われているような気がしてならない。

都市計画的な意味で言えば、戦後いちやく丹下健三が広島で「公園」という言葉を用いたが、「広場」という言葉を用いたのはおそらく坂倉が初めてだったのではないだろうか。広場は都市にアクティビティを誘起させる場として構想されていたはずだったが、果たして現在、それだけの覚悟を持って広場が計画されているのだろうか。

### 谷口吉郎 緩やかな感性

蔵元に生まれた坂倉より3歳年下になる谷口吉郎は金沢の、しかも九谷焼の窯元の出身であった。

一連の慶応義塾関連の施設、木曾街道馬籠宿にある「藤村記念堂」(1947)などがあり、いずれもモダニズム建築ではあるものの、どこか柔らかな線が流れていて落ち着いた空間を醸し出している。(なお、小諸市にも「藤村記念館」(1957)があり、これも谷口の作品だが、甲府市にある藤村記念館は「ふじむらきねんかん」であり、島崎藤村とは関係ないようだ)

解体されてしまったが、「ホテルオークラ東京本館」のメインロビー (1962)は天井が高いにもかかわらず低い椅子がゆったりと配置されており、和風を感じさせるデザインが組み込まれ、しっとりとした空間となっていた。また、現存する東京・渋谷の「乗泉寺」(1965)、「帝国劇場」のロビー (1966)、「東京国立博物館東洋館」(1968)、「東京国立近代美術館」(1969)などからも同じような印象を受けるが、そう感じるのは歳のせいだろうか。

なお、改めて言うまでもないが山形の「土門拳記念館」(1983)や香川の「丸亀市猪熊源一郎現代美術館」(1991)、東京の「東京国立博物館法隆寺宝物館」(1999)などを設計した谷口吉生は吉郎の子どもである。

坂倉準三と谷口吉郎には会うことができなかった。心残りである。



神奈川県立近代美術館  
出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)



国際文化会館  
出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)



ホテルオークラ東京本館メインロビー



東京国立近代美術館  
出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)